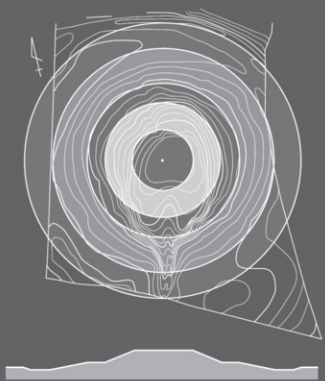
内野上古墳群

Uchino-kami Tumuli

-稲荷山古墳・山の神古墳発掘調査報告書-



2009年1月

浜松市教育委員会

例　言

1　本書は浜松市浜北区内野で実施した内野上古墳群（稲荷山古墳、山の神古墳）の発掘調査にかかわる報告である。調査は墳丘規模確認のために実施した。

2　内野上古墳群は、稲荷山古墳（内野上1号墳）、山の神古墳（内野上2号墳）、赤門上古墳（内野上3号墳）、内野上4号墳の4基の古墳で構成されている。このうち、赤門上古墳は1961年に発掘調査が実施されている。また、内野上4号墳は1979年に赤門上古墳が静岡県史跡に指定された際に行われた境界設置工事に伴い副葬品が採集され、その存在が認識された。稲荷山古墳と山の神古墳にかんしては、今回の報告分が初めての発掘調査である。

3　当発掘調査は浜松市教育委員会（浜松市浜北区区振興課が補助執行）が実施した。なお、現地作業と啓発事業の一部については、浜松市浜北文化協会に委託した。

4　発掘調査は鈴木京太郎（浜松市浜北区区振興課）、鈴木一有・大野勝美（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当職員の補助を得た。

5　整理作業は、鈴木一有が担当し、原田和子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）の補助を得た。本書の執筆、編集は、鈴木一有が行った。

6　調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

目　次

例　言
第１章　序　論 …… 1
第２章　稲荷山古墳の調査 …… 4
第３章　山の神古墳の調査 …… 10
第４章　総　括 …… 14
図　版

内野上古墳群の位置

第1章　序　論

1　調査にいたる経緯と経過

内野上古墳群は静岡県浜松市浜北区にあり、稲荷山古墳（内野上1号墳）、山の神古墳（内野上2号墳）、赤門上古墳（内野上3号墳）、内野上4号墳の4基の古墳で構成されている。内野上古墳群の周辺には、二本ケ谷積石塚群をはじめ、前期から中期の特徴ある古墳が多く分布し、内野古墳群と総称されている。

内野古墳群を構成する古墳の多くは、宅地造成や区画整理事業に伴い消滅したが、赤門上古墳や二本ケ谷積石塚群は発掘調査後に整備され、自由に見学できる状況にある。本書で報告する稲荷山古墳と山の神古墳も、1965年に開始された浜名ニュータウンの宅地造成用地に含まれたが、開発を免れて現地保存されている。ただし、両古墳にたいする本格的な発掘調査はなされず、その詳細は長らく不明なままであった。2008年、二本ケ谷積石塚群の遺跡公園の完成に合わせ、稲荷山古墳、山の神古墳の発掘調査が企画された。両古墳の正確な規模や築造時期を明確にすることを目的に、2008年8月18日から8月31日にわたり、古墳の裾部分においてトレンチによる発掘調査を実施した。調査面積は、稲荷山古墳60㎡、山の神古墳30㎡である。調査期間中、8月23日には市民を対象とした発掘体験（参加者42名）、8月31日には現地説明会（参加者130名）を開催した。

Fig.1　内野上古墳群の詳細　（左:1958年、右:1991年）

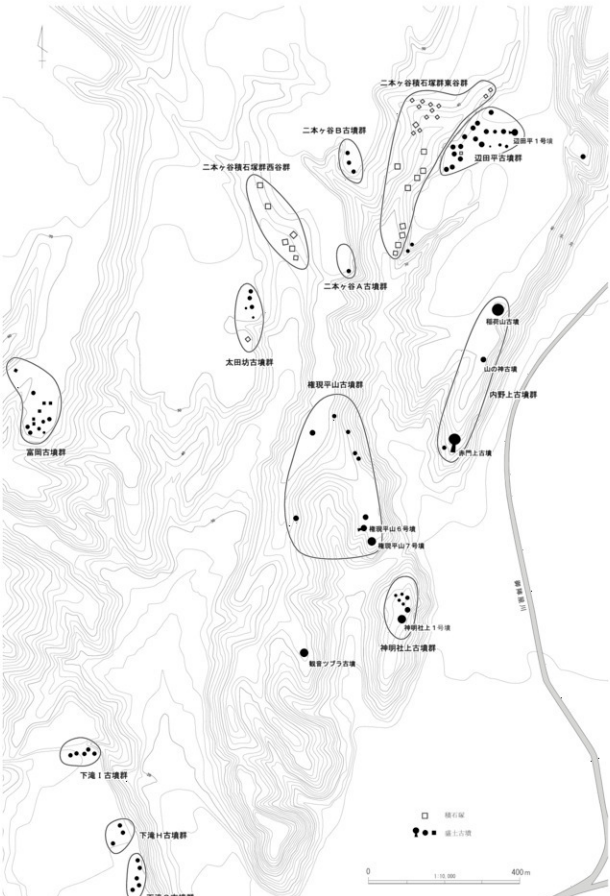


Fig.2　内野古墳群分布図

2　内野古墳群の概観

内野古墳群　(Fig.2)　内野古墳群は、浜松市浜北区内野地区に展開する古墳群の総称である。古墳時代前期から中期の古墳が多く見られる点が特徴である。埋葬施設が調査された主要な古墳として、赤門上古墳（前方後円墳、56.3m）、権現平山7号墳（円墳、25m）、神明社上1号墳（円墳、25m）、観音ツブラ古墳（円墳、25m）、辺田平1号墳（前方後円墳、20.1m）などがあげられ、いずれも直葬した木棺を埋葬施設にもつことが明らかにされている。また、二本ケ谷積石塚群は、円礫を積み上げただけの低平な積石塚のみで構成される特異な古墳群である。副葬品はおしなべて少ないが、特殊な墳丘形態、礫槨もしくは木槨が想定できる埋葬施設の構造、類似した構造をもつ古墳との比較から、被葬者に渡来系技術者集団を想定することができる。

この他、後期・終末期の群集墳である太田坊古墳群、富岡古墳群、二本ケ谷古墳群が知られる。これら群集墳の埋葬施設には横穴式石室が採用されている。

内野上古墳群　(Fig.1・3)　内野上古墳群は、内野古墳群を構成する古墳群の一つで4基の古墳で構成されている。このうち、1～3号墳については、稲荷山古墳（1号墳）、山の神古墳（2号墳）、赤門上古墳（3号墳）、といった個別名称が付けられている。内野上4号墳は赤門上古墳の前方部脇にあり、赤門上古墳の境界設置工事に伴い副葬品が採集され、その存在が認識された。

稲荷山古墳と山の神古墳については、本書で詳しく述べる通りである。赤門上古墳は全長56.3mの前方後円墳で、後円部に若干の粘土を伴う木棺直葬の埋葬施設が構築されている。埋葬施設からは、三角縁神獣鏡や刀剣、鋼鏃、鉄鏃、農工具などが出土した。古墳時代前期後葉の築造と考えられ、倭王権との強い繋がりを背景に、天竜川西岸地域を統括した人物が被葬者として考えられる。

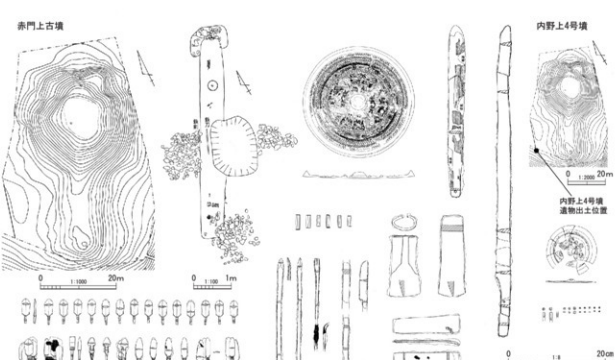


Fig.3　赤門上古墳と副葬品

第２章　稲荷山古墳の調査

１　古墳の現況と調査区の設定

墳　丘　（Fig.4）　稲荷山古墳は、1985年に実施された測量調査図からの判読では、直径35m、高さ約4mほどの円墳と捉えられていた。古墳の南側は墳頂にある小祠への参道が造成されているため、形態が乱れているが、北半部は良好な状態で墳丘が遺存している。墳丘の中ほどには平坦面が巡る状況も確認でき、墳頂平坦面も比較的整っている。周溝は古墳の北側において最も良好に遺存している。北側部分での周溝幅は約5mである。周溝は全周する状況が明確であるが、西側と東側は造成によって既に破壊されている。また、古墳の南側も古墳名称の由来である稲荷神社の敷地や造成面が及んでいて、周溝端部が失われている。

トレンチの配置　（Fig.4）　稲荷山古墳の規模を明確にするために、古墳の裾、周溝部分を中心に5本のトレンチを調査した。見かけ上の古墳の中心を原点に、任意の方向で直交する4本のトレンチを設定し、北側から時計周りに1～4トレンチとした。また、周溝が良好に遺存している北側部分にもう1本のトレンチを設定し、5トレンチとした。

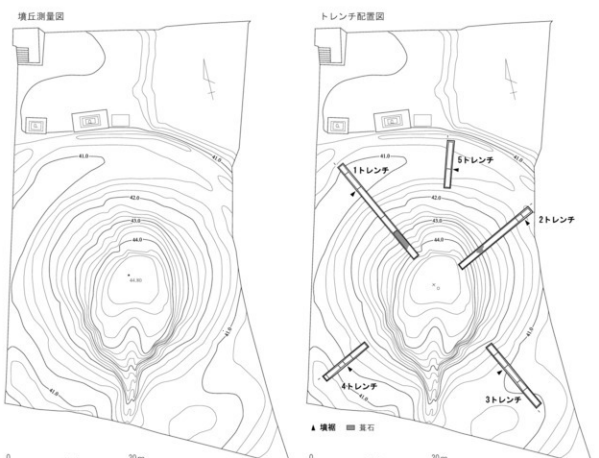


Fig.4　稲荷山古墳の墳丘とトレンチの位置

2　調査状況

調査概要　トレンチ調査の結果、稲荷山古墳は直径37mの二段築成の円墳であることが判明した。下段の大部分は地山を削り出して成形しており、葺石はみられない。上段斜面には葺石がみられる。上段と下段の間には平坦面がめぐる。埴輪は樹立されていないが、土師器の壺が並べられていた可能性がある。出土遺物は少なく、土師器、山茶碗の小破片が出土したのみである。

1トレンチ　(Fig.5)　1トレンチでは、古墳の北西側を18.5mにわたり調査した。周溝、墳丘下段斜面、中段の平坦面、墳丘上段斜面を確認した。周溝は外側の下端を確認したが、外側の上端は、樹木のため調査することができなかった。ただし、現況の高さから考えると、トレンチの北端がほぼ周溝外側の上端に相当するとみられる。周溝の幅は4.5m、深さは0.4mである。墳丘下段端部（墳裾）の傾斜変換は僅かで、周溝から墳丘下段への移行は比較的緩やかである。墳丘下段にはサブトレンチを設定し、盛土の状況を確認した。墳丘下段の大部分は地山を削り出して成形されており、中段平坦面までの盛土（5層）は僅かにすぎない。5層を整地層と捉えれば、明確な盛り土で成形された部分は墳丘上段にほぼ限定できるともいえる。

墳丘の上段において、良好な状態で葺石が確認できた。葺石は長さ3m、高さ1.5mほどが遺存しており、基底石列および、縦方向の区画石列が検出できた。上端部の葺石は崩落しており、平坦面の上に堆積していた。下段の斜面と比べると、上段の葺石の斜面の傾斜は急で、墳丘上段の上端部は崩壊していることが分かる。

葺石は長軸10～20cm程度の角礫を用い、丁寧に積み上げている。基底部には、長径40cmをこえる大型の基底石がみられ、縦方向の区画石列にも大型の石が用いられている。

2トレンチ　(Fig.6)　2トレンチでは、古墳の北東側を14mにわたり調査した。周溝、墳丘下段斜面、中段の平坦面、墳丘上段斜面を確認した。周溝は比較的深く、外側の下端は調査区外にあるとみられる。下段斜面は地山を削りだした状況が明確で標高42.0mほどの位置に幅2mにわたり平坦面が巡っている。上段斜面には葺石がみられるが、基底部は既に破壊されており、1トレンチのような基底石列はみられない。転落した葺石は多く、平坦面には石敷のように礫が散乱していた。

3トレンチ　(Fig.7)　3トレンチでは、古墳の南東側を10.5mにわたり調査した。周溝、墳丘下段斜面を確認した。周溝外側の斜面は緩やかで、外側端部は明確でない。これに対し、墳丘下段は比較的急な斜面で、墳丘下段端部（墳裾）は明確である。墳丘下段端部の地山に近い位置から、13世紀頃の山皿の破片が出土した。

4トレンチ　(Fig.7)　4トレンチでは、古墳の南西側を9mにわたり調査した。周溝、墳丘下段斜面を確認した。周溝は比較的深く、V字に近い形状をなしている。周溝外側の傾斜はトレンチの外側まで連続しており、周溝外側の上端は確認できていない。周溝の形状が他のトレンチと異なるが、周溝底面の標高（40.0m）を考慮すると、墳丘下段端部（墳裾）の認識に矛盾はない。

5トレンチ　(Fig.7)　5トレンチでは、古墳の北側を7.4mにわたり調査した。周溝と墳丘下段斜面を確認した。周溝は比較的浅く、外側、内側の斜面ともに緩やかである。周溝内の埋土から土師器の小破片が出土した。

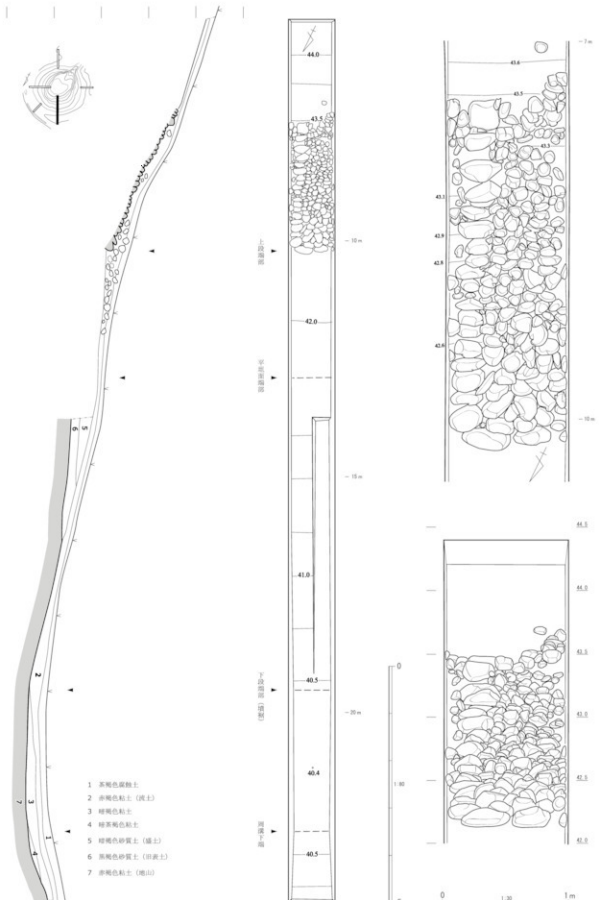


Fig.5　稲荷山古墳　１トレンチ実測図

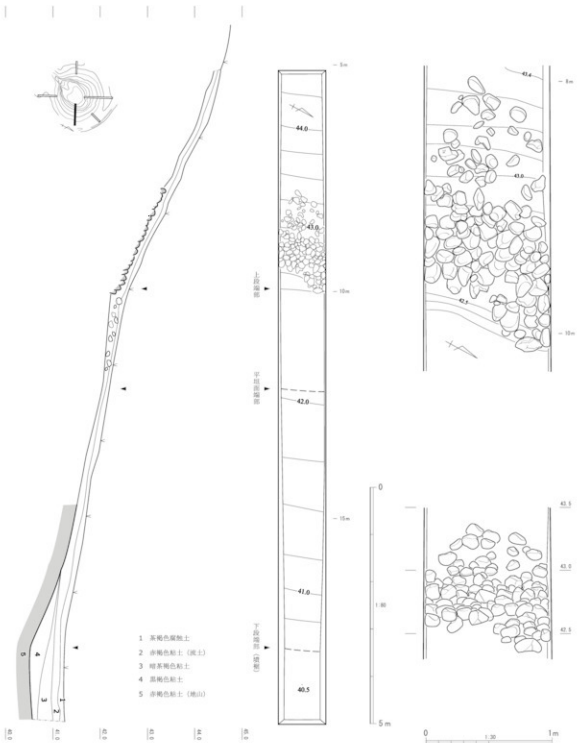


Fig.6　稲荷山古墳　2トレンチ実測図

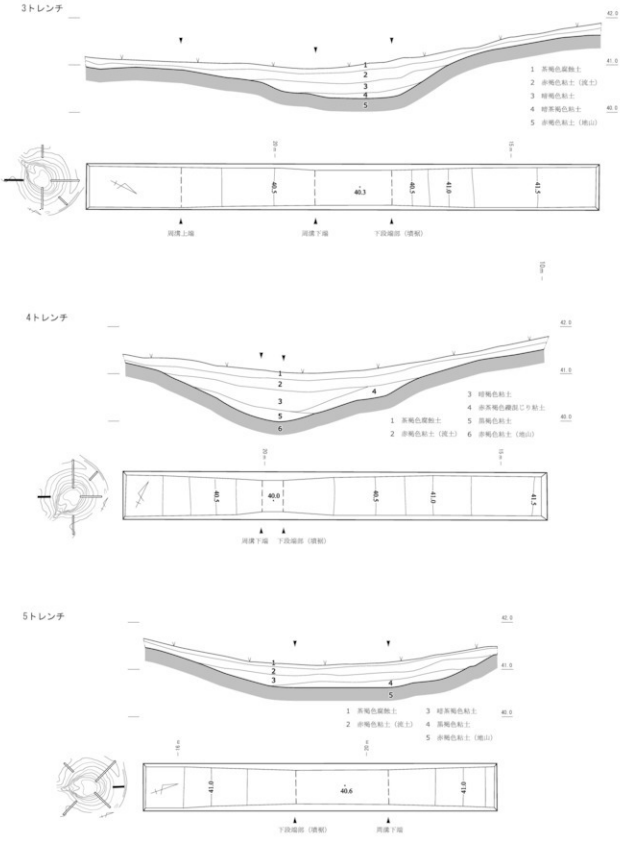


Fig.7　稲荷山古墳　３～５トレンチ実測図

3　稲荷山古墳の規模と時期

古墳の形態と規模　(Fig.8)　今回の調査によって、稲荷山古墳は周溝を巡らせた二段築成の円墳であることが明確になった。墳丘下段の端部を墳裾と捉えると、その規模は、直径37m、高さ4.3mほどに復元できる。葺石は上段斜面にのみみられる。墳丘下段の多くは地山削り出しによって成形され、墳丘上段はほぼ盛り土によって構築されたと考えられる。葺石の有無も、こうした墳丘構造の違いに起因しているとみられよう。

出土遺物　5トレンチの周溝埋土から土師器の小破片が出土した。遺存部分がごく僅かで、器種や製作時期などを限定することが難しいが、墳丘上に立てられていた壺である可能性が高い。また、古墳の南側に盛られた参道の壁面から須恵器甕の小破片が出土した。この須恵器は6・7世紀に降る可能性が高いこと、後世の盛土の可能性がある部分から出土したことから、古墳に直接伴うか疑わしい。また、古墳の南東にある稲荷神社からも5世紀末から6世紀前半頃の須恵器甕の破片を採集した。稲荷社の周辺に別の古墳が存在した可能性が考えられる。稲荷山古墳の南側参道部分から出土した須恵器も、稲荷神社の方から盛られた土に混入していた可能性が高いと判断できよう。このほか、3トレンチの墳裾付近から13世紀頃の山皿が出土している。

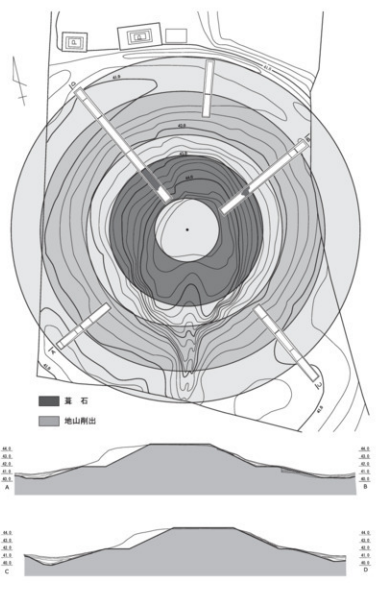


Fig.8　稲荷山古墳復元図

築造時期　区画石列を伴う葺石を備えていること、直径37mの規模の古墳であるにもかかわらず、埴輪をもたず土師器の壺が墳丘に並べられた可能性があることなどが、築造時期を考える上で判断基準になりうる。これらのことから、稲荷山古墳の築造時期は、古墳時代中期初頭から中期中葉あたりと捉えておくのが妥当であろう。

第３章　山の神古墳の調査

１　古墳の現況と調査区の設定

墳　丘　（Fig.9）　山の神古墳は、1985年に実施された測量調査図からの判読では、直径17m、高さ約1.8mほどの円墳と捉えられていた。古墳の北東側は墳丘が崩れているが、南側は比較的良好に遺存している。古墳を全周するような明確な周溝は確認できないが、古墳の南西側に若干の窪みが認められる。稲荷山古墳と比べ墳丘の高まりは顕著でなく、墳丘の崩壊も進んでいる。発掘調査によって明確な墳裾が捉えられるか、危惧されるような状況であった。

現在、古墳の周囲は宅地造成によって土取りがなされ、独立した島状の景観をなしている。しかし、本来はなだらかな台地の縁辺部に古墳が造営されていたことが、造成前の地形図から読み取れる。取り残された敷地内の東側にみられる斜面は、造成される前の台地の地形が反映されているものとみられよう。山の神古墳は台地上の平坦面から斜面に移行する傾斜変換点に造営されていることが分かる。

トレンチの配置　（Fig.9）　山の神古墳の規模を明確にするために、古墳の裾を中心に5本のトレンチを調査した。見かけ上の古墳の中心を原点に、任意の方向で直交する4本のトレンチを設定し、墳丘が良好に遺存している南側に補助的なトレンチを追加設定した。トレンチの名称は北西側から時計周りに1～5トレンチとした。

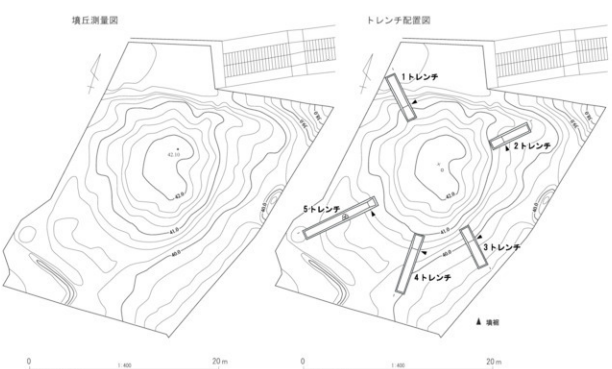


Fig.9　山の神古墳の墳丘とトレンチの位置

2　調査状況

調査概要　トレンチ調査の結果、山の神古墳は直径16mの円墳であることが明確になった。周溝は北西側を中心に存在し、南東側は明確な周溝はみられず、平坦面が形成されている。

1トレンチ　(Fig.10)　1トレンチでは、古墳の北西側を6mにわたり調査し、周溝を確認した。周溝の規模は、幅3m、深さ0.5mほどであり、比較的深く掘削されている。

2トレンチ　(Fig.10)　2トレンチでは、古墳の北東側を4mにわたり調査し、墳裾を確認した。古墳の裾周りには、非常に浅い掘り込みがみられるが、明確な周溝とは呼びがたい。

3トレンチ　(Fig.11)　3トレンチでは、古墳の南東側を3.4mにわたり調査し、不明瞭ながら墳裾を確認した。周溝はみられず、平坦面が確認できたのみである。

4トレンチ　(Fig.11)　4トレンチでは、古墳の南側を6mにわたり調査し、墳裾を確認した。周溝はみられず、広い平坦面が確認できたのみである。

5トレンチ　(Fig.11)　5トレンチでは、古墳の南西側を8.4mにわたり調査した。浅い掘り込みを確認した。掘り込みの幅は広く、7m程度である。幅が非常に広いことに加え、1トレンチで確認した周溝と形状が異なるため、この掘り込みの性格を断定することは難しい。掘り込みの中央部分で、長径40cm以下の円礫がまとまって確認された。この円礫の周囲からは、須恵器（Fig.12-1）や灰釉陶器（Fig.12-2、3）が出土した。

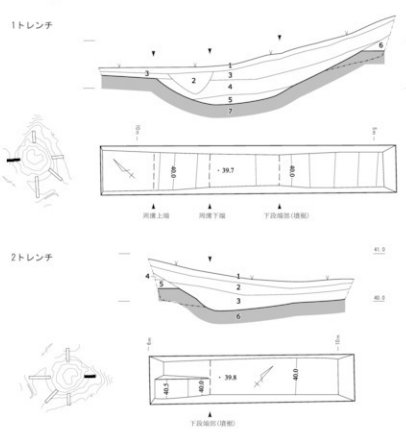


Fig.10　山の神古墳　トレンチ実測図（1）

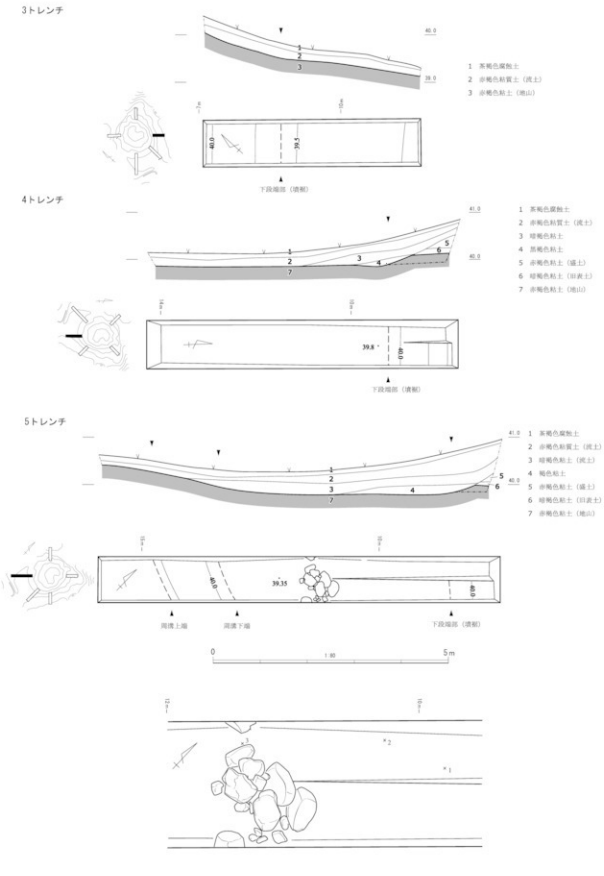


Fig.11　山の神古墳　トレンチ実測図（2）

3　山の神古墳の規模と時期

古墳の形態と規模　(Fig.13)　今回の調査によって山の神古墳は、直径16m、高さ2mの円墳であることが明確になった。周溝は全周せず、北西側にのみ掘削されている。東側斜面や南側には平坦面が形成されている。なお、5トレンチで確認した掘り込みの性格は不明確である。古墳に伴う墓道などの施設の可能性があるが、墳裾からの幅が広いことから断定は難しい。南側に広がる平坦面の縁辺部分と捉えておきたい。

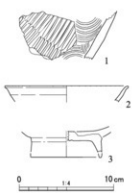


Fig.12　出土遺物

出土遺物　(Fig.12)　5トレンチから須恵器の小破片（Fig.12-1）が出土している。甕の胴部破片であり、色調は淡灰色を呈し、焼成は不良である。小破片のため、明確な時期は断定できないが、調整、焼成、色調の特徴から、6世紀前葉から中葉頃の所産と考えられる。また、須恵器とほぼ同じ位置から、灰釉陶器（Fig.12-2・3）が出土している。円礫を伴う掘り込みは、平安時代頃まではほぼ埋まっていない状況であったことが分かる。

築造時期　山の神古墳の築造時期を考えるにあたっては、5トレンチから出土した須恵器を根拠とするのが最も有効である。須恵器の時期は6世紀前葉から中葉頃と推定でき、山の神古墳は同時期の築造と捉えてよいだろう。須恵器が出土していることに加え、5トレンチで確認した円礫が横穴系埋葬施設の閉塞石と同様の特徴を有すること、古墳が台地縁辺の傾斜変換点に立地すること、山側にのみ周溝がみられ谷側や南側には平坦面がめぐることなどの諸特徴も、山の神古墳の築造時期を6世紀とみることにおいて矛盾がない。

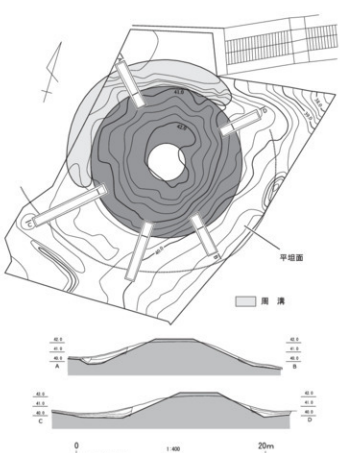


Fig.13　山の神古墳復元図

以上のことから、山の神古墳の築造時期は古墳時代後期中葉（6世紀前葉から中葉）である可能性が高いと判断できる。埋葬施設にかかわる情報は少ないが、5トレンチで確認できた円礫を埋葬施設の閉塞石と捉えるなら、横穴式石室もしくは、横穴式木室の蓋然性が高い。

第4章　総　括

1　調査成果

稲荷山古墳　稲荷山古墳は直径37m、高さ4.3mの円墳である。二段築成で上段にのみ葺石が施されている。全方向に周溝をめぐらせ、周溝外側の上端を結ぶ古墳の大きさは直径46mである。周溝埋土から僅かながら土師器の小破片が出土しており、墳丘上に土師器の壺を並べていた可能性が高い。出土遺物が僅かなことから築造時期を明確にすることが難しいが、本格的な周溝をめぐらせた古墳の形状、区画石列を伴う葺石の特徴、埴輪をもたず土師器の壺をならべている点などを考慮すると、古墳時代中期初頭から中葉頃（４世紀末葉から５世紀前半）に築造されたと推定できる。

山の神古墳　山の神古墳は直径16m、高さ2mの円墳である。周溝は山側にのみめぐらせ、谷側と南側の裾には平坦面が形成されている。出土遺物や、閉塞石に似た円礫の出土、周溝や平坦面の特徴などから、古墳時代後期中葉（６世紀前葉から中葉）に築造されたと考えられる。埋葬施設は明確でないが、横穴式石室もしくは横穴式木室と推定できる。

2　稲荷山古墳の位置づけ

墳丘規模　（Tab.1）　稲荷山古墳の直径37mという墳丘規模は、浜松市内でも有数の大きさである。円墳としては浜北区最大であり、浜松市内でも、東区千人塚古墳（直径49m）、西区入野古墳（直径44m）に次ぐ市内第３位の規模を有する。遠江全域で比較すると、磐田市兜塚古墳（直径80m）を筆頭に、直径60m～40m級の古墳に次ぎ、稲荷山古墳は10番目程度の規模である。

大型円墳の築造時期　遠江における大型円墳の比較をTab.1に示す。遠江における大型円墳は高根山古墳や観音山古墳など古墳時代前期に遡る事例もあるが、大多数が古墳時代中期に築造されたものである。この中でも中期初頭から前葉に築造されたものが多い点は留意される。現在の磐田市を中心とする遠江中枢部では、この時期、大型前方後円墳の築造が途絶え、大型円墳の築造が活発になる。稲荷山古墳の築造時期もこの段階に重なる可能性が高く、内野古墳群における首長墓系譜の変革も遠江中枢部の動向と連動していると評価できるだろう。

Tab.1　遠江の大型円墳

順位	所在地	古墳名	規模
1	磐田市	兜塚	80 m
2	磐田市	城之崎丸山	60 m
3	磐田市	高根山	52 m
4	磐田市	秋葉山	50 m
5	浜松市	千人塚	49 m
6	磐田市	宝久路丸山	47 m
6	磐田市	京見塚	47 m
8	浜松市	入野	44 m
9	磐田市	米塚	40 m
10	浜松市	稲荷山	37 m
10	掛川市	浅岡神社３号	37 m
10	磐田市	匂坂大塚	37 m
13	磐田市	観音山	36 m
14	磐田市	土器塚	36 m
15	浜松市	谷津	36 m
16	磐田市	目隠山	35 m

葺石の特徴　稲荷山古墳には、基底石列と区画石列を有する葺石技法が採用されていることが明確になった。こうした丁寧な葺石の工法は、内野古墳群では系譜をたどることが難しく、何らかの技術供与があったものと捉えられる。同様の葺石手法は、磐田市堂山古墳や、袋井市五ケ山B2号墳など、遠江の最有力古墳において典型的にみることができる。稲荷山古墳の築造時期を絞り込むことが難しいため、具体的な関連地を示すことができないが、首長墓系譜の変革が遠江中枢域と連動している可能性を重視する

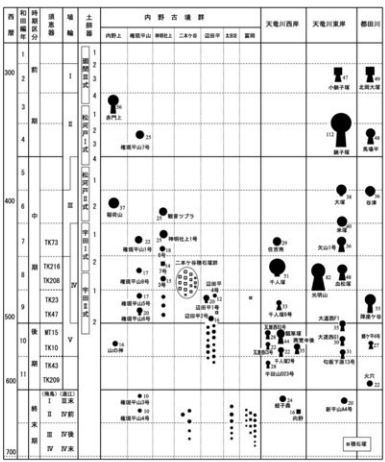


Fig.14　内野古墳群と周辺の主要古墳編年図

なら、葺石技法も同地域からの影響力が強かったとみてよい。

稲荷山古墳の葺石は、上段のみに施され、下段は地山削り出しのままである。古墳被葬者の性格や階層的位置は、墳形や、墳丘の大きさの違いにとどまらず、埴輪の採用や、葺石・段築の有無などにも反映されている。稲荷山古墳で明らかになったように、葺石が施される位置が部分的であるという点においても、古墳被葬者の性格や階層的位置が表現されていたとみてよい。遠江の大型古墳における葺石の情報は、未だ不明瞭な部分が多く、詳細な検討は難しい。古墳の築造時期を明確にした上で、同時期の古墳相互の特徴を比較する必要があるだろう。

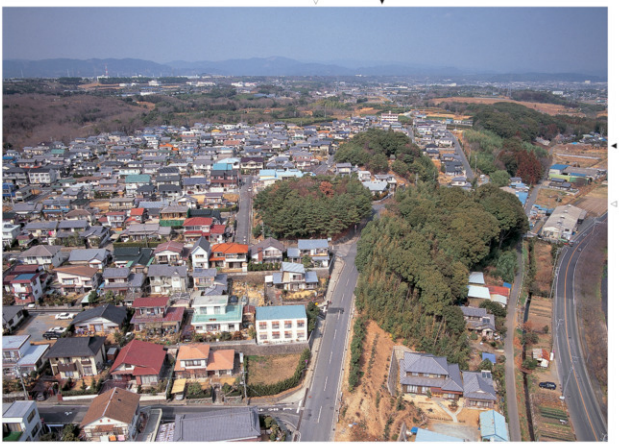
3　内野上古墳群造営主体の性格

内野上古墳群は、内野古墳群の中でも平野部の眺望が最も良好な立地環境にある。赤門上古墳や稲荷山古墳の墳丘規模は内野古墳群のなかで突出しており、山の神古墳も後期古墳としては規模が大きい部類に入る。また、内野上古墳群では中小古墳が密集することがなく、有力古墳の存在が突出している点も留意したい。赤門上古墳、稲荷山古墳、山の神古墳と断続的に続く有力古墳を築いた集団は、内野地区における造墓集団の中でも最も優位な系譜を有していたものと想定できる。

それぞれの古墳被葬者が直接的な血縁関係にあったかは不明であるが、内野地区を墓域と定めた歴代の集団の中でも、最も格が高い人物が内野上古墳群に古墳を築いたと評価できる。内野上古墳群では、古墳時代前期、中期、後期にそれぞれ有力古墳が1基ずつ構築されている点も、倭王権や遠江中枢部とのかかわりを反映したものと捉えてよいだろう。

［参考文献］

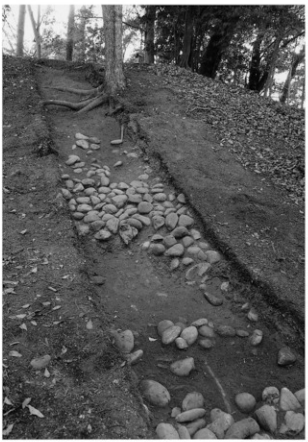
下津谷達夫ほか1966『遠江赤門上古墳』浜北市教育委員会、下津谷達夫ほか1975『遠江内野古墳群』浜北市教育委員会、七原恵史ほか1971『内野権現平山古墳群』浜北市教育委員会、久野正博ほか2000『内野古墳群』浜北市教育委員会、浜北市2004『浜北市史　資料編　原始古代中世』



1　稲荷山古墳・山の神古墳　遠景（南から）　［▲稲荷山古墳　△山の神古墳］

2　稲荷山古墳　全景（北から）

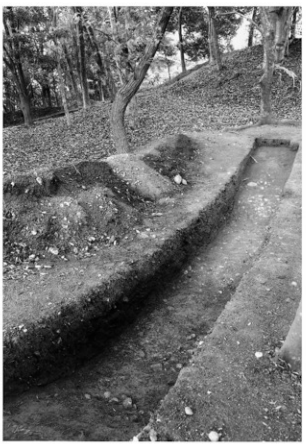
稲荷山古墳　1トレンチ（北から）



1　稲荷山古墳　2トレンチ（東から）

2　稲荷山古墳　3トレンチ（南東から）

3　稲荷山古墳　4トレンチ（南から）



4　稲荷山古墳　5トレンチ（北西から）

稲荷山古墳　1トレンチ葺石検出状況（北西から）

1　山の神古墳　全景（南から）

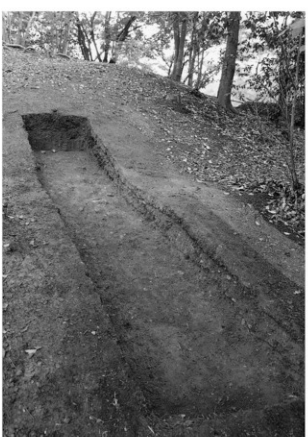
2　山の神古墳 出土　須恵器

3　山の神古墳 出土　灰釉陶器

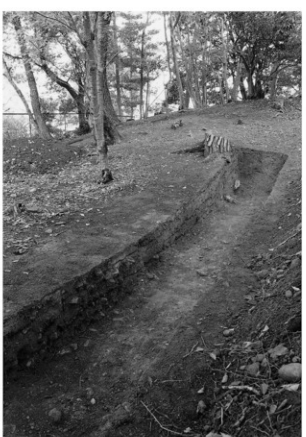
山の神古墳　5トレンチ（南から）

1　山の神古墳　1トレンチ（北西から）

2　山の神古墳　2トレンチ（東から）



3　山の神古墳　3トレンチ（南から）



4　山の神古墳　4トレンチ（南東から）

報告書抄録

書名（ふりがな）	内野上古墳群　（うちのかみこふんぐん）
編著者名	鈴木　一有
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466　FAX（053）457-2563
発行年月日	2009年1月23日

ふりがな 遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
うちのかみ 内野上古墳群	静岡県 浜松市浜北区 内野	22202	06 ・ 01 ・ 66	137度 45分 15秒	34度 47分 30秒	2008年 8月18日 ～ 8月31日	90㎡	範囲確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事項
稲荷山古墳	古墳	古墳時代中期	土師器	直径37mの二段築成の円墳
山の神古墳	古墳	古墳時代後期	須恵器 灰釉陶器	直径16mの円墳

内野上古墳群

—稲荷山古墳・山の神古墳発掘調査報告書—

2009年1月23日

編集機関　浜松市教育委員会

浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当

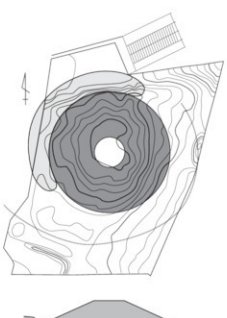
（教育委員会の補助執行機関）

〒430-0946　浜松市中区元城町103-2

印　　刷　中部印刷株式会社

Uchino-kami Tumuli

A Report of Archaeological Investigations at 5th-6th century
Burial Mounds in Western Shizuoka, Japan



January, 2009

Hamamatsu City, Board of Education